

土木と学校教育フォーラム
28th, August 2016

稲村の火

お話と史実

筑波大学大学院 谷口綾子



甚

第十 稲むらの火

「これはたゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方どうなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したこと

ない無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には一向氣がつかないものやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸附けられてしまった。風とは反對に波が沖へくと動いて、見る／＼海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現れて来た。

「大變だ。津波がやつて来るに違ひない。」と、五兵衛

は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみによられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで家にかけて込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛出して来た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」と五兵衛は、いきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ

救

没



又一つ、五兵衛は夢中で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つたまゝ、沖の方を眺めてゐた。日はすでに没して、あたりがだん／＼薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘をつき出した。「火事だ。荘屋さんの家だ。」

と、村の若い者は急いで山手へかけ出した。續いて老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目にはそれが蟻の歩みのやうに、もどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて来た。彼等はすぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつちやつておけ。——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人達は、追々集つて来た。五兵衛は、後から後

から上つて来る老幼男女を一人々々數へた。集つて来た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔とを、代る／＼見くらべた。

其の時、五兵衛はカーパーの聲で叫んだ。

『見る。やつて来たぞ。』

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見る／＼太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて来た。

『津波だ。』

と誰かが叫んだ。海水が絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと山がのしかゝつて来たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきを以て陸にぶつかつた。人々は我を忘れて後へ飛びのいた雲のやうに山手へ突進して来た。水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は自分等



の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度村の上を海は進み又退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は波に巻ぐり取られてあどかたもなくなつた村をたゞあきれて見下してゐた。

稲むらの火は風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまま、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。



小泉八雲の英語作品
“*A Living God*”を中井常蔵
が翻訳・再話.

文部省の教材公募に入選し
、1937年から10年間、
国定国語教科書
(国語読本5年生)に掲載.

稲村の火 史実 あらすじ

1854(安政元)年11月5日(旧暦)、安政南海地震による大津波が紀州藩広村(現在の和歌山県広川町)を襲いました。このとき、村の郷士、濱口梧陵が、暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、収穫したばかりの稲を積み上げた「稲むら」に火を放って高台に導きました。濱口梧陵の自分の財産を投げ打った犠牲的精神により、多くの命が救われたのです。



濱口梧陵

出典：広川町教育委員会

※この物語は1937(昭和12)年から10年間にわたり小学校国語読本(5年生)に掲載されました。

稲村の火 災害後の復旧・復興

■津波で田畑は使えず，漁船は流され，家屋も倒され流された
村人の中には希望を失い，村を捨てようとする者も...

■震災後の濱口梧陵の行動

(1)被災者のために米・衣服・仮小屋を提供 →それでも村人が流出

(2)「村人自らの手で堤防をつくる」計画を思いつく： 広村堤防

→ 材料費・賃金等，多額の**私財を投じ堤防建設**

4年後，高さ5m、長さ600mの堤防を完成

(3)堤防建設工事を行う被災者に**日当支払い**：

→ **村人離散を防ぐ**

■広村堤防のその後

1946(昭和21)年昭和南海地震の大津波で、
村の大部分を津波から守った。

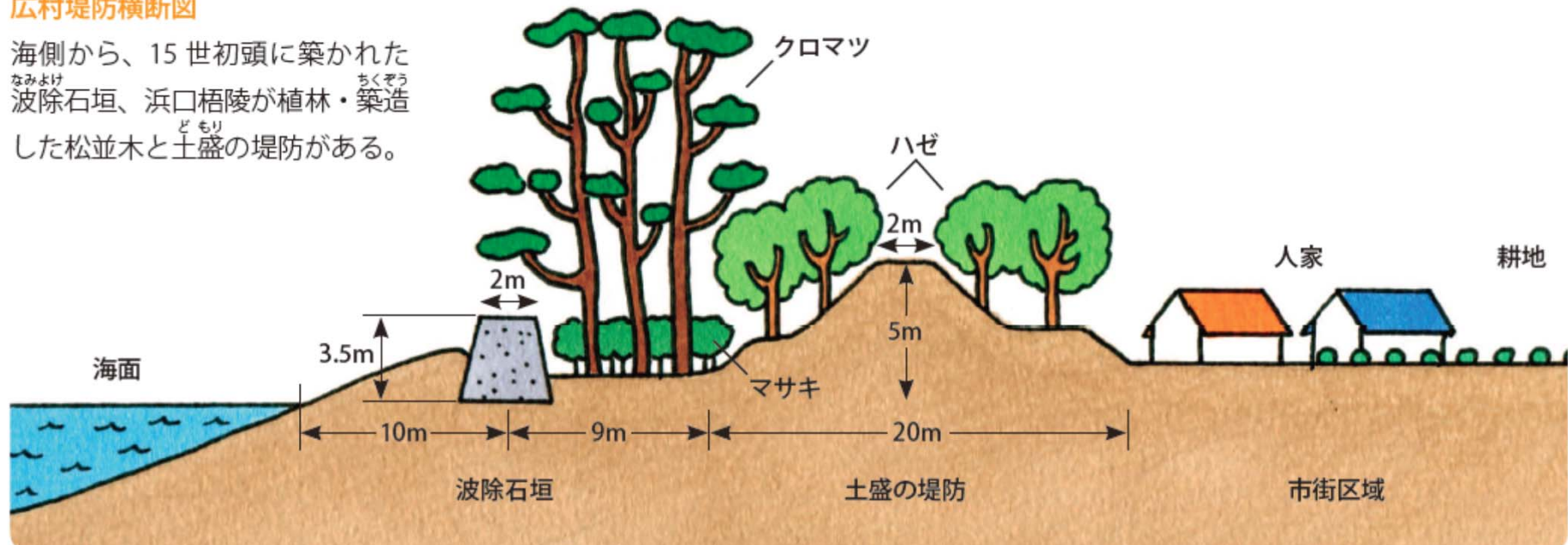
稲村の火 堤防を守るあゆみ

大津波(1854年)から50 回忌の1903 年、慰霊と濱口梧陵らの偉業をしのび、広村の有志による堤防への土盛りが行われた。これが「津波祭」の始まり。

以後、毎年11 月に堤防補修と防災意識の継続を意図し、地元小・中学生による土盛り等が続けられている。

広村堤防横断図

海側から、15 世初頭に築かれた波除石垣、浜口梧陵が植林・築造した松並木と土盛りの堤防がある。



光村図書の国語教科書(5年)

河田先生の話： 儀兵衛の堤防づくりの意義

- 1.物質的な援助だけでなく、**防災事業**と住民の**生活援助**を合わせて実施
- 2.住民同士**互**いに**助**け合いながら、**自分たちが住むところを守る**意識を促した：**共助**
- 3.百年後という**長期計画**の**必要性**と**有効性**を教えた

ありがとうございました



Public Psychology Lab., University of Tsukuba